

南豊話の入声

大嶋 広美

1. はじめに
2. 下入
 - 2.1. 南豊話の -l 韻尾
 - 2.2. 南豊話以外の -l 韻尾
 - 2.3. 南豊話 [-l] 化の音声学的考察
 - 2.4. 南豊話の下入の調値
3. 上入の調値
4. 結論

1. はじめに

江西省東部に位置する南豊県の方言には、周辺の方言とは違った様々な特異な現象がみられる。南豊話の音韻体系の特徴については大嶋1995で既に述べたが、本稿ではその特徴の一つである入声について取り上げる。

南豊話の入声には、二つの特徴がある。一つは入声の歯茎閉鎖音韻尾 -t の一部が -l 韻尾に変化しているという希有な現象がみられること、もう一つは、調値の分裂は一般に古清・濁声母を条件に起こるところを、南豊城関話の入声の場合、声調分化が声母によるものではなく、撰の条件の下で起こっていることである。例えば：

上入45調：作 tɔʔ78A、桌 tɔʔ78A、目 muʔ78A、竹 tsYʔ78A

下入23調：合 hɔp78B、夾 kap78B、雜 that78B、乏 fat78B¹⁾、
末 mol78B、活 huol78B、不 pul78B、突 thul78B、
骨 kul78B

上入45調は古宕江曾梗通撰の場合に、下入23調は古咸深山臻撰のときに現れることがわかる。だが、前の5撰が声門閉鎖音韻尾 -ʔ であり、後の4撰の韻尾は両唇音・歯茎閉鎖音韻尾 -p、-t であることから、ここでは撰というよりも韻尾によって調値が分かれたものだと言いなおすべきかも知れない。これらの

特徴は、隣県の南城話、黎川話、広昌話、宜黄話にはみられないものである。²⁾

本稿では、大嶋1995で説明しなかった音声的特徴の部分を補足しながら、上述の南豊城関話の入声の二つの特徴の変化の過程について考察する。

2. 下入

2.1. 南豊話の -l 韻尾

南豊城関話の -l 韻尾は、上述の通り下入の歯茎閉鎖音韻尾 * -t に由来する。郊外の太和話と白舎話には -l 韻尾が出現しない³⁾ので、-l 韻尾は恐らく城関話一帯特有のものであろう。

南豊話の -l 韻尾は、韓国語のように反り舌でしかもはっきりとした [l] 音ではなく、軽く弱くわたり音の如く現れる。南豊話 -l 韻尾の発音は、主母音を発した後、舌を後ろに引きかつ窪ませ、舌先が硬口蓋の中程で口蓋部分につかずに上がった状態に現れ、その後舌先が歯茎の裏に到達してそこで停止するものである。北京語の r 音ほど舌が後ろよりではない。

南豊話に出現する -l 韻尾は -t 韻尾に由来するが、等によって -l 韻尾の出現の有無が生じることがなく、また必ずしも全ての -t 韻尾が -l 韻尾に変化するというわけではない。後母音に続く時、特に両唇閉鎖音声母、軟口蓋閉鎖音声母と組み合わせさせた時はかなり鮮明な -l 韻尾が現れる。一方、前母音 [i]、[a] の場合は -l 韻尾の出現が後母音ほど多くなく、特に母音 [ε] に続く場合は -l 韻尾の出現は皆無である。また、-l 韻尾がたとえ後母音に後続されていても、話者の発音の仕方次第で現れない（または聞こえにくい）というゆれも時折観察される。⁴⁾

南豊話に -l 韻尾があるという最初の報告は楊1971であるが、楊氏は、突 hul 78、骨 kul 78、忽 hul 78 のわずか 3 文字しか報告していない。南豊話に関する資料では他に、顔1986&1988と陳1991がある。しかし、顔氏は南豊話 -l 韻尾の出現については何も触れていない。陳氏は、县城・古城では [p, t] 韻尾だが、市山では -l 韻尾があるという報告のみであり、どの資料も -l 韻尾の現象についての細かな説明は加えていない。

2.2. 南豊話以外の -l 韻尾

-l 韻尾を有している方言は南豊話だけでない。南豊県からだいぶ離れた江西省北部、湖南省東北部、湖北省東南部の贛語にも現れている。

湖北省通城 (趙等1948) : 達 dhal、末 mol、律 lil

湖南省平江長寿桂橋 (董1987) : 抹 mal、哲 tol、撮 tsol

江西省都昌 (李/張1992) : 達 lal、出 dzəl、
 都昌玉階 (楊1971) : 熱 ləl、日 ləl、骨 kuəl、物 vəl
 修水 (通城1991) : 八辣 -al、割則 -ol、一筆 -il
 永修 (顏1988) : 盒 hol、骨 kul、杌 ul
 南昌⁵⁾(楊1971) : 忽 fuəl、骨 kuəl、物 uəl
 余干 (楊1971) : 出 thəl
 銅鼓 (楊1971) : 髮 fal、日 ləl、必 pil、骨 kuəl
 龍南、長勝、長寧等 (鄭1994) : 甲 [(-)al]、割 [(-)ol?]
 骨 [(-)ul?]

字音の例はないが、平江話 (楊1974) では [y] 母音の後の -t 韻尾が -l 韻尾に変わりやすいこと、江西省都昌土塘話 (陳1983&1991) では [ot ut at uat ok iok uok] の韻尾が -l 韻尾に変わっていること、上高話 (Sagart 1989, p. 186) では、[a] 母音の後の -t 韻尾が -l 韻尾のようだという報告もある。

以上のことから、南豊話以外、都昌土塘話や永修話等でも -l 韻尾が多く現れ、また声母が無声音以外有声音 (濁音) でもみられることがわかる。濁音声母をもつ方言は、江西省北部と湖南省東北部、湖北省東南部に集中しているが、まさしく -l 韻尾は濁音地域と重なって出現している。

2.3. 南豊話の [-l] 化の音声学的考察

以下では、南豊話に -l 韻尾が現れる時どのような音声学的特徴がみられるのかを、音声機器を使って調べた。

最初に、前母音で声母が有気音の字音を例にあげる。前母音の場合は -l 韻尾の出現のゆれが多く、-t 韻尾と -l 韻尾の両方を観察することができる。図1と図2のスペクトログラフは、数字の「七」の発音を調査時に録音したテープで写したものである。(但し音声実験のために録音したものではないので、雑音が全く入っていないというものではないが、音声機器にかけるときはできるだけ雑音が入らないよう努めた)。字音で調査した際は [təhil] と -l 韻尾が現れたが、別の日に語彙を調査した時には təhit と -t 韻尾で発音し、発音の速度もほぼ同じものである⁶⁾。

それらの音をスペクトログラフで見ると、はっきりとした違いがみられる。それは、-l 韻尾が現れないときは普通話の有気音の如く母音を発する前に有気音 [təh] が少し現れる (図1) のに対し、-l 韻尾が現れるときは声母 (有気音) に強いインテンシティと摩擦音が生じ、その分、母音の長さが短くなっている (図2) ことである。声母の力強い呼気を伴う発音により声母の発した時間が長

図1 「七」 [tshit]

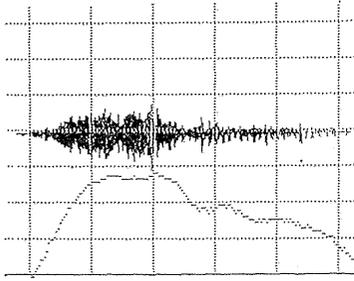
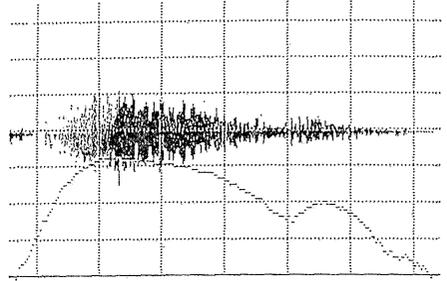
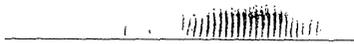


図2 「七」 [tshil]



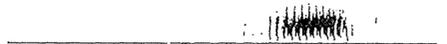
t s h i t

図3 「筆」 [pit]

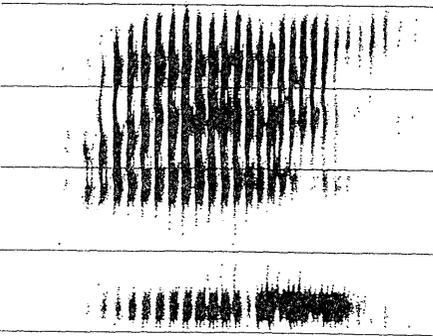


t s h i l

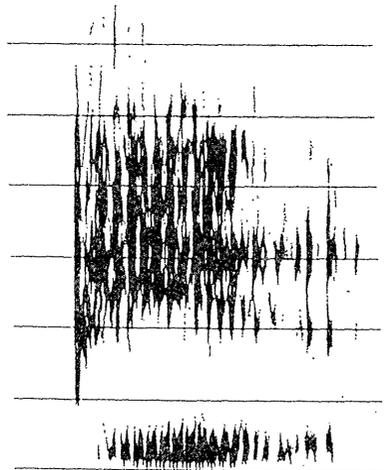
図3 「筆」 [pil]



p i t



p i l



↑

くかかった分、主母音を発する時間が急減し、母音を発する力が突如弱くなったところで -l 韻尾が出現していることがわかる。他の有気音声母の場合でも同様に、-l 韻尾が現れない時よりも有気音声母の摩擦と力が多く加わっている。

一方無気音声母の場合はどうか。図3は城関話の「筆」[pit]、図4は城関話「筆」[pil] のスペクトログラフである。

[pit] の場合、最初の閉鎖音が現れた後 i 母音が長く発せられている。一方図4の [pil] の場合、初めの閉鎖音 [p] に強いインテンシティ (矢印) が現れ、i 母音も図2と同様短い長さで発音されていることがわかる。つまり、図2と図4のグラフから、口むろの呼気の気圧が高くなったところで声母の閉鎖が破裂したため、声母発端部分の呼気の強さと力が入り、その反動で母音は弱く弛緩され、-t 韻尾が有声音化 (-l 韻尾) が起こったと考えられる。

南豊話の場合、-l 韻尾は [ɛ] 母音の後には現れない。南豊話の主母音 [i, Y, u, ɔ, a, ɛ] をみると、[ɛ] 母音は他の母音と比べ舌面が平らで張りつめた母音であるために l 音の出現を難しくさせたのであろう。楊1971をはじめ、今まで報告されている江西省の方言の -l 韻尾をみても、[ɛ] 母音の後に -l 韻尾が現れているのは多くない。南豊話の -l 韻尾は、強い呼気を伴った有気音声母 (→濁音声母) →母音の弱化→ -l 韻尾の出現という過程で起きたものだと考える。

2.4. 南豊話の下入の調値

南豊話の下入の調値の高さについてだが、顔1986と陳1991が報告した資料によると12調である。筆者が調査したインフォーマントの下入の調値はそれほど低いものではなく、やや高めめの23調の調値であった。下入の声調交替の時は調値は3調で、高い調値に変化することはなく調値が安定していること、そして -l 韻尾が現れないときは3調である (後述) ことから、元々から調値は3調ではないかと推定する。南豊話は、-l 韻尾の場合、2B (陽平: 声母が有気音の場合。調値は34調) と同様、声母の有気音の強い (場合によって濁音に近い発音) 状態によって、調値の初めの部分が下がって調値が上昇型に変化していったと考えられる。贛語、特に有気音で調値が分かれている北部の贛語の全ての調値が、調値の最初の部分が下降した上昇調をとっていることと共通している⁷⁾。贛語にみられる声母の濁音化や調値分化についてはもっと更に検討する必要がある、そのことについては別稿で取り上げる。

3. 上入の調値

上入の調値は45調であるが、声母が無気音（特に歯茎閉鎖音声母）の場合しばしば調値が5調になる傾向がある。城関話の-ʔ韻尾は、筆者が今まで聞いたことのある、例えば上海語のようなただ単に呼気を止めて喉を緊張させたような-ʔとは音学的に異なる。特に無気音を発音するときに顕著に現れるのだが、喉をかなり締め付けて力強く呼気を止めるような発音である。このような発音の仕方は、陽平2A（45調）、連読変調の時の陰去・陽去の末位音節の調値5調でも同様に現れる。⁸⁾ 喉頭緊張を極度に伴った発音は太和話と白舎話には現れないので、城関話の、あるいは城関話のインフォーマントだけに見られる特徴なのかもしれない。声調交替の場合、調値45調の上入に属する字が非末位音節に置かれた時は、今まで呼気を力強く高い調値で止めていたのが、曲線を描くような降調↘の声調に変化する。

例：竹 teYʔ78A → 竹床 teY↘soŋ2A、

屋 uʔ78A → 屋頂 u↘tian3

この曲線調値は、かなり張りつめた喉頭緊張度から開放へと急に声門をいきなり緩めて低い調値へと進んだものではなく、調値が最初の上がるところから急降下して2調にたどりつくまで喉頭緊張が緩んでいない。一方、太和話の声門閉鎖音韻尾は、城関話のような喉頭部分を強く圧迫したような発音ではないもので、声調交替では曲線をとらず42調の降調の調値である。このように城関話の上入の曲線調値は、太和話よりも声門をかなり緊張を起こしている故に調値も一層高くなっている。

単字調では上入・下入の2つの調値は古清・濁声母による分化がみられないが、声調交替の場合も同じように、古清・濁声母によって調値が分裂している様相を呈していない。南豊城関話入声の二字組の声調交替は以下の通り（二字組の声調交替の調査では連続変調調査表を使用。軽声を除く）。

1) 舒声：上入・下入

前字	後字	上入 45調	下入 23調
陰平	13	13 : <u>45</u>	13 : 2 ~ <u>23</u>
陽平2A	45	34 : <u>45</u>	35 : 2 ~ <u>23</u>
2B	34	34 : <u>45</u>	35 : 2 ~ <u>23</u>
上声	22	12 : <u>45</u>	12 : <u>23</u> ~ 3
陰去	323	22 : <u>45</u>	22 : <u>23</u> ~ 3
陽去	212	22 : <u>45</u>	22 : <u>23</u> ~ 3

2) 上入・下入：舒声

前字\後字	陰平	陽平A	陽平B	上声	陰去	陽去	上入	下入
上入	45 ↘ : 13	↘ : 45	↘ : 34	↘ : 22	↘ : 323	↘ : 212	↘ : 45	↘ : 23~3
下入	23 2 : 13	3 : 45	2 : 34	3 : 22	3 : 323	3 : 212	3 : 45	3 : 2~23

上入・下入の声調交替の調値は、単字調とほぼ同じで大きな調値変化はみられない。声調交替については、二字組・三字組の単語の内部構造の違いによる規則、強弱アクセント、軽声、変調等細かく論じる必要があるが、ここでは、声調交替におこる二つの現象について述べる。

一つは、声調交替時の -l 韻尾をもつ下入の調値である。下入が、1)と2)にみられるように、末位音節、非末位音節に位置する時は調値が2調、或いは3調になる。-l 韻尾が非末位音節に置かれた場合、調値の違いだけでなく、-t 韻尾は -l 韻尾に変化しない(活用 huot78B (3調) iun6、割麦 kot78A (3調) ma78A)。

二つは、上入と下入が同じ調値になることがある、ということである。上表では上入が非末位音節に置かれ、しかも [やや強] +弱アクセントをもつ場合、太和話と同様42調の調値が現れる。また、その調値は同じく [やや強] +弱アクセントをもつ時の -p、-t 韻尾にも現れるのだが、その時韻尾 -p、-t が脱落する。例えば「吸引」ei 42調 in 22調。後字のゼロ声母で i 母音とつながって「吸」[eip] の -p 韻尾が落ちるのだが、声調交替時に韻尾をもたない -ʔ 韻母と同じ交替調値に変化したと考えられる。-p、-t 韻尾は、しばしば後字の声母が次濁声母(鼻音声母)やゼロ声母で母音が前字の語末母音と同じ場合に韻尾脱落が起きる。-p、-t 韻尾に現れる42調と -ʔ 韻尾の交替調値42調には調値下降や発音された時の喉頭の具合等音声的にも違いはみられない。そして -p、-t 韻尾は、上入と異なるとたとえ韻尾脱落があろうと曲線下降型の調値を持たない。一方太和話は原調及び声母を保ち続け、このような変化がみられない。

声調交替の場合、ここでいえることは、たとえ上入・下入が非末位音節、末位音節どちらに置かれても、単字調と同様、声母が古清・濁によって調値分裂を起こしていないということである。調値が分かれていたという痕跡が全く見られないことから、南豊話の入声は、陰入と陽入が合流して一つの調値になった⁹⁾ 後、韻尾によって調値が分かれたと考えられる。

4. 結論

南豊話太和鎮の入声の調値の -ʔ 韻尾の場合は4調、-p 韻尾と -t 韻尾の場合は34調で、調値の高さがほとんど変わらず接近している。調査の時は調値が上昇調かどうかで調値を判断したのだが、みな4調に聞こえる場合が多く、区別し難いものであった。城関話も、太和鎮と同様、かつては下入と同じまたは近い調値をとっていたのが、後に声門閉鎖音のピッチによりしかも喉をかなり緊張させた発音によって調値が高めになったのではないかと考えられる。この現象は、南豊県より少し南に下った江西省南部の安遠話（安遠県1993）でもみられ、南豊話と同じく韻尾による声調の分化が起きている。

		古清声母	古濁声母
安遠	-p, -t	21調	44調
	-ʔ	55調	55調, 53調 (少数)

安遠話では、両唇音・歯茎閉鎖音韻尾 -p、-t の場合古清・濁声母の条件下で調値の分裂が起こっているのに対し、声門閉鎖音韻尾 -ʔ の場合は古清・濁声母問わず同じ55調の調値である。以前周辺の客家語と同じく元々は古清声母（陰入）の調値は低く、古濁声母（陽入）の調値がやや高めであったのが、¹⁰⁾ 南豊話と同様声門閉鎖音韻尾 -ʔ が古清・濁声母問わずに喉頭部分の緊張によるピッチによって調値が上昇した可能性が高い。

両唇音・歯茎閉鎖音韻尾の調値が安定していることから、元々は両唇音・歯茎閉鎖音韻尾の3調だったと考える。上入・下入が同じ調値であったのが、-p、-t 韻尾をもつものは強度の有気音により23調と調値の発端部分が下がって、-l 韻尾が現れ、-ʔ 韻尾をもつものは、声門にかなり緊張を伴った発音により調値が45調へと上昇していったと考える。

注

- 1) 大嶋1995で述べたが、-p 韻尾はときどき -t 韻尾に変わるといったゆれがみられる。陽声の場合も同様 (-m>-n)。数字78は調類番号で、ここでは入声（陰・陽）を指す。
- 2) 南城話は李／張1992、黎川話は顔1993、広昌話は広昌県1995、宜黄話は宜黄県1993を参照。本稿で取り上げる南豊城関話、太和話、白舎話は筆者の調査による。城関話のインフォーマントは大嶋1995と同様。太和話は楊老六氏（1994年調査当時47歳。太和鎮出身。中学教師）、白舎話は李炳輝氏（調査当時50歳。白舎鎮出身。糧食管理員）。貴重な御時間をさいて協力して下さった楊氏と李氏に心からお礼を申し上げる。
- 3) 城関話と同様、声母が軟口蓋音、特に後母音に後続する場合、-t 韻尾が -l 韻尾に

- 近いものになることがあるが、城関話の如くははっきりとした l 音ではない。
- 4) 大きな声で発音すると -l 韻尾が現れない。インフォーマントは -l 韻尾と -t 韻尾の両方の発音の違いについては何も感じていない。逆に、筆者が真似して -l 韻尾で発音すると、インフォーマントは発音が正しくないとお答になった。
 - 5) 熊1995の南昌話には -l 韻尾が記載されていない。また、以下の平江話（湖南省1993、中嶋1987）にも -l 韻尾についての記述がみられない。筆者が調査した龍南話には -l 韻尾が観察されなかった。-l 韻尾の存在が、調査者によって差がみられる。
 - 6) 本稿のスペクトログラフは、筑波大学城生佰太郎教授の研究室の音声機器を使って、筆者自身が撮ったものである。先生のご厚意に深くお礼を申し上げる。
語彙、字音という理由と -l 韻尾の出現の有無とは関係ない。
 - 7) 例えば、「唱片」*thun* 22調 *phien*₅ 調、「態度」*thai* 22調 *thu*₅ 調、「飯店」*fan* 22調 *then*₅ 調。22調は、陰去・陽去の変調。
 - 8) 例えば、陳1991 (pp. 20-21) によれば、永修話の有気音声母の陰平の声調は24調、陰去の声調は334調、修水話の陰去の有気音声母の場合の声調は45調である。
 - 9) 隣県の南城話と広昌話は入声 5 調の一つの調値。両方言とも -p, -t 韻尾がなく、-ʔ 韻尾のみで調値は 5 調。なお、広昌話の入声の調値の記述が他の文献と異なっている（広昌県1995：入声 5 調、顔1986：陰入 5 調、陽入23調、陳1991：陰入 4 調、陽入 2 調）。
 - 10) 顔1986によれば、隣県の会昌話は陰入 1 調：陽入 5 調、尋烏話は陰入 2 調：陽入 5 調、定南話は陰入 1 調：陽入34調。

参考文献

- 安遠県志編纂委員会編1993『安遠県志』、新華出版社
- 陳昌儀1983「永修話声調的演變」、《江西大学学报》(社会科学版)第2期
1991『贛方言概要』、江西教育出版社
- 董爲光1987「湘鄂贛三界的“1”韻尾」、《語言研究》第1期(総第12期)
- 湖南省公安厅『湖南漢語方言字彙』編纂組編1993『湖南漢語方言字彙』、岳麓書社
- 江西省広昌県志編纂委員会編1995『広昌県志』、上海社会科学院出版社
- 江西宜黄県志編纂委員会編1993『宜黄県志』、新華出版社
- 李如龍・張双慶編1992『客贛方言調查報告』、廈門大学出版社
- 中嶋幹起1987『湘方言調查報告』(上冊)、アジア・アフリカ言語文化研究所
- 大嶋広美1995「南豊音系」、《中山大学学报(社会科学版)》第3期
- Sagart, Laurent 1989 PHONOLOGIE ET LEXIQUE D'UN DIALECTE GAN :
SHANGGAO, *CAHIERS DE LINGUISTIQUE ASIE ORIENTALE* vol.
XVIII, No. 2
- 通城県方志局主編1991『通城方言』、中国文史出版社
- 熊正輝1995『南昌方言詞典』、江蘇教育出版社
- 顔森1986「江西方言的分区(稿)」、《方言》第1期

- 1988 「江西方言の声調」、『江西師範大学学报』(哲学社会科学版)第3期(総第51期)
- 1993 『黎川方言研究』、社会科学文献出版社
- 楊時逢1969 「南昌音系」、中央研究院歷史語言研究所集刊第39本下
- 1971 『江西方言聲調の調類』、中央研究院歷史語言研究所集刊第43本第3分
- 1974 『湖南方言調査報告』、中央研究院歷史語言研究所專刊66、上冊。
- 趙元任・丁聲樹・楊時逢・吳宗濟・董同龢1948 『湖北方言調査報告』、国立中央研究院
歷史語言研究所專刊、商務印書館(臺聯國風出版社1972年の重刊を参考)
- 鄭材1994 「從語音的歷時演變看贛南客家方言的分片問題」、『客家縱橫』(增刊)、閩西客家学研究会

(静岡大学非常勤)